2022.1.2

博物館 Dictionary No.225

◆あなたに語る・時代を超えて生きる心◆

展示中の作品について、研究員が分かりやすく解説します。

虎―見たことがない生き物を描く

虎と日本人

もしあなたが、実際に見たことがない生き物、例えば「龍」を描いてほしいと頼まれたら、どうしますか？　きっと、インターネットや本で、他の人がどんなふうに描いているか調べて、参考にするでしょう。龍がどこにすんでいるか、どんな性格をしているか、お話を読んで想像を膨らませるかもしれませんね。

龍と一緒によく描かれる「虎」は、本当にいる生き物です。でも日本には野生の虎がいなかったので、昔の人は簡単に見ることができませんでした。江戸時代の終わり頃になると、ときどき、生きた虎が中国や朝鮮半島から連れてこられて、街なかで見世物になりました。でもそれまでは、多くの日本の人にとって虎は、龍と同じように、絵やお話の中だけの生き物だったのです。

身近にいない生き物なのに、虎は、日本の美術の中にたくさん登場します。虎がいた中国や朝鮮半島から伝わる、様々なお話や美術作品がとても魅力的だったから、日本の人たちも虎に惹かれたのでしょうね。虎は、山の獣たちを従える、強くて賢い生き物だと信じられてきました。それだけでなく、子を大切に育てる、愛情深い生き物だとも考えられました。さらに、黄色と黒の、美しいしま模様の体を持っています。強く、やさしく、美しい虎は、人々のさまざまな願いを込めて、美術の中に描かれました。

たとえば日本の武将たちは、自分の強さや立派さを示すために、城の襖に虎を描かせました。悪いものが入ってこないよう、お寺の襖絵に、魔除けのための龍と虎が描かれることもあります。子が生まれ、家が栄えることを願って、虎の親子の絵が描かれることもありました。様々な身分の人が使う、道具や着物、アクセサリーにも虎は登場します。たとえば（図1）は、武家の女の人が身に付けた帯です。金・黄・黒・緑……色とりどりの糸

図1　竹に虎文様掛下帯（部分）　江戸時代（19世紀）　京都国立博物館

で刺繍をして、虎と竹を表わしています。日本人にとって虎は、「身近にいない」けれど「身近にある」生き物だったのです。

虎を描く

「虎は竹林にすむ」と考えられたので、竹と虎はよく一緒に描かれます。京都の絵師、尾形光琳（1658～1716）が描いた「竹虎図」（図2）の虎は、とても可愛らしいですね。強くて勇ましい虎のイメージとずいぶん違いますが、きっと、わざとそう描いているのでしょう。大きな頭や、足をそろえてお行儀よく座る姿が、なんとなく猫のようにも見えます。

図2　竹虎図　尾形光琳筆　江戸時代（18世紀）　京都国立博物館

この絵の他にも、日本には、猫をお手本にしたような虎の絵がたくさんのこされています。昔の人も気になっていたようで、江戸時代につくられた、こんな川柳が残っています。

猫でない証拠に竹を書いて置き

「竹が一緒に描いてあれば、猫のような絵でも虎に見える」、そんな皮肉が込められているのです。この川柳からは「竹と虎」という組み合わせが、誰でも知っている当たり前のことだった、ということも分かりますね。

図3　虎図　岸駒筆　江戸時代（19世紀）　京都国立博物館

絵やお話をもとに描くだけでは物足りず、本当の虎を追い求めた人もいました。「虎図」（図3）を描いた岸駒（1749/56～1838）は、リアルな虎を描くために様々な努力をしています。生きた虎を見るのが難しいので、虎の頭蓋骨に虎皮をかぶせてスケッチしたり、虎の足の剥製を手に入れて、関節の位置や仕組みを調べたりしました。

でも残念ながら、目は猫をお手本にするしかなかったようで、昼間の猫のような縦長の瞳で描いています。虎の瞳は、実際には丸くて、縦長にならないのです。

日本の虎の絵の中には、現実と想像が入り混じっています。昔の人が、どんな思いを込めて、どんな工夫をして虎を描いているのか、考えながら、じっくり作品を見てくださいね。

（教育室　水谷亜希）

印刷・富士印刷社